

佳作

親父

兵庫県 青木啓泰

僕は昔、親父が大嫌いだった。常にピリピリとした雰囲気漂わし、僕が何か失敗すると激怒して怒鳴る。いつもエラそうにふんぞり返っている親父が憎くてしょうがなかった。このまま自分は一生親父を憎んで生きていくんだろうなと考えたこともあった。しかし、そんな親父嫌いな僕を一変する出来事があった。

小学校低学年の頃、家族みんなで外食に出掛けた。相変わらず僕は親父嫌いで、この時も一言も口を聞かなかった。そして帰り道、久しぶりの外食とあって僕はかなり上機嫌だった。そのおかげで僕は周りを見ずに道路に飛び出してしまった。前方からバイクが来るのに気づいたのは「危ない」という母親の声がしたからだ。僕は逃げようとしたが、足がすくんでまったく動かない。ああ、終わったと思った瞬間、自分の体が暖かい何かに包まれる感じがした。

そう、親父が僕を抱き締めてくれていた。バイクに背を向けて僕を守ってくれていた。

抱き締めた後、横にステップして間一髪でバイクを避ける事ができた。僕は啞然としていた。「どうして自分を助けたのか」まったく分からなかった。すると親父は僕に「バカヤロウ」と怒鳴り、拳骨をお見舞してきた。その後は親父の説教オンパレードだ。しかしいつもみたいに嫌な気持ちにはならなかった。不思議な感じだった。涙は流れていたがいつもとは違う暖かな涙が流れていた。気がつく僕は親父に抱きついていていた。親父もびっくりしたみたいで慌てていたが、僕の頭をなでながら「お前はオレの子や、まだこんなところで死ぬのはもったいない。」と言ってくれた。その言葉が僕の心に深く刻まれた。

それからは親父が大好きになり、今でもちよくちよく2人で出掛けている。僕は今教育大学に行くために必死で勉強している。教師になりバリバリ働いて親父に恩返しをするという計画を成功させるためだ。